

ネイチャーアートギャラリー

石 田 弘 明^{1)*}

Gallery of Nature Art

Hiroaki ISHIDA^{1)*}

要 旨

兵庫県立人と自然の博物館における次世代の展示のコンセプト、展示手法、システムなどについて検討した。当館の最も重要な機能の一つである生涯学習支援機能を強化するための展示として、ネイチャーアートギャラリーが必要であると考えられた。ネイチャーアートギャラリーは、これからの社会を担う子供達や自然にあまり関心のない人達を主なターゲットとし、これらの人達に自然を楽しんだり、学んだり、自然にふれあったりするためのきっかけを提供することを目的としたものである。ネイチャーアートギャラリーのコンセプトを具現化するために必要な展示手法・システムとして、(1)実物資料を多用すること、(2)実物資料の持つ魅力や美しさを最大限に引き出すような演出(アートの演出)を工夫すること、(3)移動式の展示を積極的に導入することなどが挙げられた。

キーワード：きっかけづくり、実物資料、展示、ネイチャーアート、生涯学習支援

は じ め に

人と自然が共生する環境優先社会の実現は21世紀における最も重要な課題の一つであるが、この課題解決のためには、自然・環境に関する正確な知識と理解が地域社会の隅々にまで広く浸透していることが必要である。しかし、昨今の我が国では、経済成長や物質的な豊かさを追い求めるあまり、身のまわりの自然・環境に対する興味・関心が希薄になっており、長い年月の中で育まれてきた、豊かな自然環境に根ざした日本人特有の自然観や自然と共生する知恵や技術、文化などが失われようとしている。このような嘆かわしい状況を打破するためには、第一段階として自然・環境への興味・関心を喚起するきっかけづくりが必要である。しかしながら、このようなきっかけを提供する制度はほとんどなく、またそれを実現できる施設・機関・人材も非常に限られている。

兵庫県立人と自然の博物館(以下、ひとはく)では、開館以来、「人と自然の共生」を基本テーマとした常設展示を行っており、その理念や展示内容の専門性・オリジ

ナリティーなどについては比較的高い評価が得られている。しかしその反面で、(1)展示内容が専門的で難しい、(2)実物資料が乏しい、(3)時代の変化を十分に反映していない、などの問題が指摘されており、人々のニーズや時代の変化に対応した展示の戦略的リニューアルが大きな課題となっている。

平成15年度春からスタートしたひとはくのネクストミュージアムの検討会では、冒頭で述べたような問題やひとはくが抱えている様々な課題をふまえて、ひとはくの将来像やひとはくの果たすべき役割などについて議論を行った。ここでは、こうした議論の中から生まれたひとはくの次世代の展示=ネイチャーアートギャラリーのコンセプト、展示手法、システムなどについて述べる。

ひとはくの常設展示の特色と課題

博物館の展示はもともと中世ヨーロッパにおける王侯貴族の権威を誇示するために行われたものであり、それは当時の階級システムを維持する上で重要な役割を担っ

¹⁾ 兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境再生研究部 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Division of Ecological Restoration, Museum of Nature and Human Activities, Hyogo; Yayoigaoka 6, Sanda, 669-1546 Japan

*兼任：姫路工業大学 自然・環境科学研究所 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Institute of Natural and Environmental Sciences, Himeji Institute of Technology; Yayoigaoka 6, Sanda, 669-1546 Japan

ていた(松宮, 2003)。しかし、その後の時代の変化に伴って展示の目的も大きな変化をとげ、現在では、生涯学習のツールとしての役割や観光資源としての役割など多種多様な役割が博物館の展示に課せられている。ひとはくの場合、常設展示は前述したように「人と自然の共生」を基本テーマとしており、他館に比べて普及教育的または啓蒙的な性格の強い展示となっている。また、展示制作当時の最新の知見や職員(研究員)のオリジナルの研究成果・知見を積極的に取り入れており、このため、専門的にみて非常に興味深い内容となっている。このようなテーマ性、専門性は環境保全や生涯学習の観点からみて極めて意義の高いものであり、ひとはくの常設展示の大きな特色(魅力)となっている。しかしながら、展示の多くはそのテーマ性や専門性などのために、自然・環境に関する一定の知識を持たない人にとっては理解困難でとっ付きの悪い内容となってしまっている。換言すれば、糸魚川(1999)のいう展示レベル(I:楽しむ, II:理解する, III:考える-科学する)のIが不十分な状態となっているため、観覧者の知識レベルに応じた学習支援やそのレベルアップのための支援がうまく行われていないと言える。また、環境保全分野のように事態が急速に変化している分野の展示については、情報が著しく古くなっており、時代の変化に全く対応していないという問題が生じている。これらの問題は、生涯学習支援を使命とするひとはくにとって極めて深刻な問題であると考えられる。

ネイチャーアートギャラリーのコンセプト

ひとはくは生涯学習支援を重点事業の一つと位置づけているが(兵庫県教育委員会事務局, 2001)、今後はその方向性をさらに発展させ、生涯学習支援の拠点施設となることを目指している。このような目標を達成し、様々な人達の生涯学習を効果的に支援するためには、顔を合わせて対話するコミュニケーション型の学習プログラムを質・量共に高いレベルで実施することが必要である。しかし、このような方法は時間的・労力的な面での制約が厳しく、多数の人の学習ニーズに応えることは容易ではない。これに対して、展示はきめ細やかな学習支援サービスという点では不十分であるが、不特定多数の人に対応することができるという点や展示ならではの学習効果がある(千地, 1998)という点で一定の有効性が認められる。従って、展示機能は今後のひとはくにとっても重要な機能であると思われる。ただし、現在の常設展示は、前述したように看過できない幾つかの問題を抱えていることから、ひとはくがさらなる進化を遂げるためにはこれらの問題の解決が不可欠である。そして、この解決のための一手段として、ネイチャーアートギャラリーの設

置が必要であると考えられる。

ネイチャーアートギャラリーとは、これからの社会を担う子供達や自然にあまり関心のない人達を主なターゲットとし、これらの人達に自然を楽しんだり、学んだり、自然にふれあったりするためのきっかけを提供することを目的としたものである。この目的は具体的には次の3点にまとめられる。

- (1)感動や驚きを与え、自然に対する好奇心・探求心を喚起する。
- (2)イマジネーションを刺激し、自然に対する自発的な気づき・学びを引き起こす。
- (3)自然にふれあうためのきっかけを提供し、観覧者を地元の自然へ誘導する。

このような展示をスーパーレファレンスルームや資料・情報ライブラリーと共に設置し、これらを有機的にリンクさせることで、前述の問題の解決が可能となるだけでなく、他に例をみない段階的かつ連続的な学習支援サービス(子供から高齢者までの幅広い世代の人達が生涯にわたって自ら主体的に学ぶことのできる多面的な学習形態)を提供することができると考えられる。

なお、現在ひとはくが提供している学習スペース(セミナー室以外)は展示室とレファレンスルーム(ひとはくサロン)の2つに大きく区分され、その空間的割合は後者よりも前者の方が圧倒的に大きい。今後は生涯学習支援機能をより一層強化するために、スーパーレファレンスルームを核とした学習スペースの整備が必要と考えられる(図1)。ただし、スーパーレファレンスルーム、ネイチャーアートギャラリー、資料・情報ライブラリーが互いに独立して存在すると三者のリンクが十分に機能しないため、三者が融合的に存在できるようなスーパーフラット型の施設整備が必要であろう。また、現在の常設展示が果たしている主な機能、すなわち自然・環境科学、自然・環境保全、自然・環境情報に関する展示機能

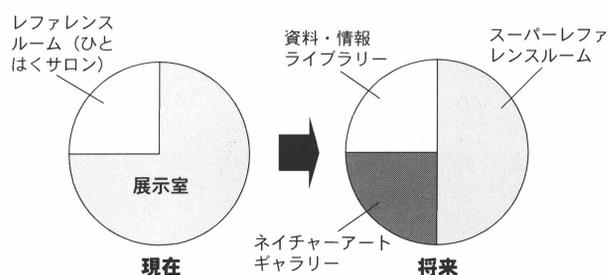


図1 学習スペースの種類とその割合

はスーパーレファレンスルームの機能の一部として今後も存続させることが望まれる。

展示手法とシステム

ネイチャーアートギャラリーのコンセプトを具現化する上で、以下のような展示手法、システムの導入が有効であると考えられる。

実物資料の多用と演出の工夫

生物や化石、鉱物などの自然物はまさに自然界が作り出した芸術作品であり、その実物資料は観覧者に感動や驚きを与えたり、観覧者のイメージネーションを刺激したりする上で大変効果的である。また、実物資料は映像資料（写真など）よりもはるかに情報量が多いため、観覧者の感性や知識に応じた多面的な見方が可能である。このことは、自然に対する自発的な気づきや学びを引き起こすための重要な条件と言える。従って、ネイチャーアートギャラリーでは、実物資料にとことんこだわり、それを十二分に活用した展示を行うことが肝要である。また、観覧者の自発的かつ多様な気づき・学びを促すために、展示の解説は極力控えるべきであると思われる。ただし、単に物を羅列しただけの展示では観覧者を惹きつけることは非常に困難であるため、実物資料の展示にあたってはハンズ・オンの手法（染川・吹田、1996；染川ほか、2000）を採り入れたり、ジオラマ的な演出を工夫したり、さらには、糸魚川（1999）が述べているように実物資料の持つ魅力や美しさを最大限に引き出すような演出（アートの演出）を工夫したりしなければならない。このような演出のうち、アートの演出の例として、ひとつはく企画展である「ワンダフルカラー（平成14年2月17日～6月16日）」や「ワンダフルデザイン（平成16年2月14日～5月16日）」での演出が挙げられる。これらの企画展では、実物資料の演出を色々と工夫したことで（写真1、2）、一般観覧者の興味・関心を引き出すことに成功している。また、海外の博物館や神奈川県立生命の星・地球博物館、北九州市立自然史・歴史博物館などの展示も実物資料のアートの演出という点で大変参考になる（写真3～8）。以上の例は、実物資料を主体とした展示とそのアートの演出の有効性を示している。

なお、自然史系の博物館でよく展示されている資料に恐竜化石のレプリカがある。このような恐竜関連の展示は多くの人に驚きと興奮を与えることができ、また、多くの人が見てみたいと希求する展示の一つである。しかし、他施設の状況を検討してみると、こうした展示はすぐに飽きられてしまう傾向があるように思われる。これは、映画や本などで恐竜がよく取り上げられていたり、多くの博物館で恐竜関連展示が行われているために、恐

竜の新鮮味が薄れていることが主な原因ではないかと思われる。従って、ネイチャーアートギャラリーにおける恐竜関連展示の内容・ボリュームについては慎重に検討することが必要であろう。

移動式展示の導入

一般に、博物館の常設展示は固定式のものが多いが、ネイチャーアートギャラリーでは三田市立有馬富士自然学習センターの展示（写真9～11）のように移動式の展示を積極的に導入する。これにより、展示の部分更新や収蔵資料の活用が容易となり、人々のニーズに対応しやすくなる。また、展示の配置を自由に変更できるため、館内のスペースを展示以外の様々な用途（フェスティバル、セミナー、イベントなど）で柔軟に活用できるようになる。さらに、数多くの展示・資料をキャラバン事業（移動博物館事業：図2；兵庫県立人と自然の博物館、2003；藤本、2003）で活用したり、他施設・他団体などへ貸し出したりすることが可能になるほか、キャラバン事業で得られた様々な資料をギャラリーの中に効果的に組み込んでゆくことで、地域の自然に関する展示の充実とリフレッシュメントを図ることができる。このことは、観覧者を地元の自然へ誘導する大きなきっかけになると思われる。

以上のように、移動式展示を導入することで、ひとつはくを拠点とする展示・資料の全県的な循環・活用システム（図3）を構築することができると思われる。

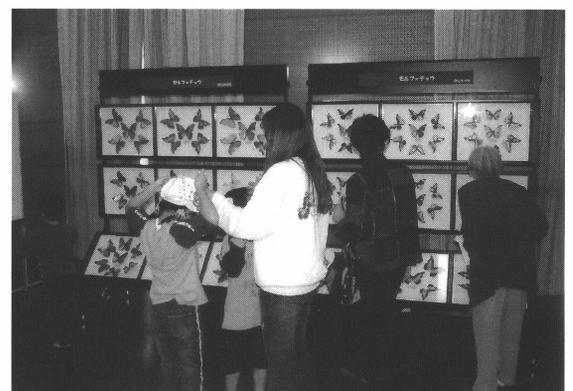
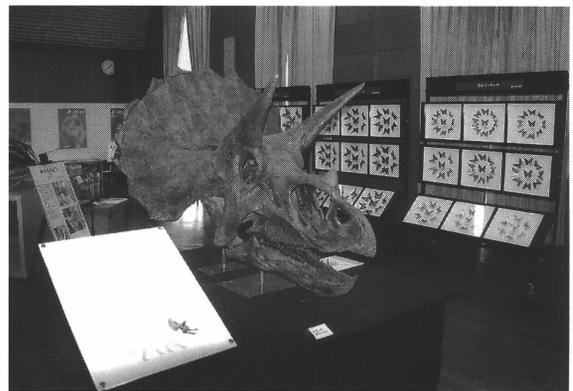


図2 キャラバン事業で行った「ひとつはくギャラリー」の様子

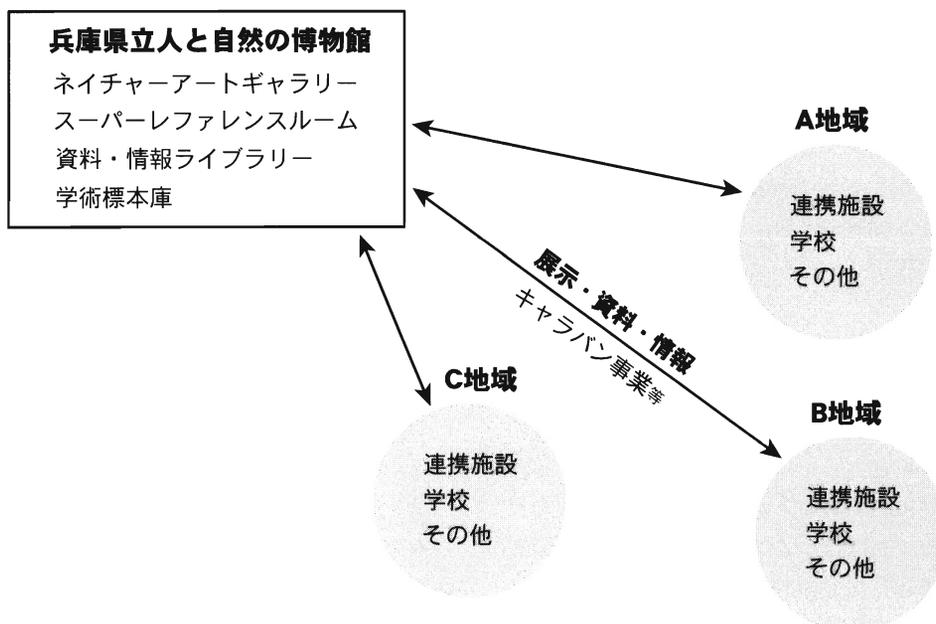


図3 ひとはくを拠点とする展示・資料の循環・活用システムの概念図

展示内容

ネイチャーアートギャラリーの展示内容の詳細（テーマ、使用する資料、ボリュームなど）についてはほとんど検討しておらず、その具体化は今後の大きな課題であるが、それにあたってはキャラバン事業やスクールパートナーシップ事業、セミナー、フェスティバル、各種イベントなどにおける展示の活用方法を十分に検討することが必要であろう。

期待される成果

ネイチャーアートギャラリーによって得られると考えられる直接的な成果は、観覧者の自然に対する好奇心が喚起され学習意欲が向上すると共に、地元の自然に対する興味・関心が高まることである。そして、間接的な成果としては、このような人たちの中からひとはくが提供する生涯学習支援サービス（スーパーレファレンスルーム、資料・情報ライブラリー、セミナー、生涯学習院）

を高次利用する人が出現し、やがてはこれらの人たちが生涯学習支援や自然・環境マネジメントの担い手となることが予想される。

文 献

- 千地万造（1998）自然史博物館。八坂書房、東京、253p.
- 藤本真里（2003）「人博（ひとはく）がやってくる」の成果とこれから。ハーモニー、no. 40、5-6.
- 兵庫県教育委員会（2001編）人と自然の博物館の新展開。兵庫県教育委員会、37p.
- 兵庫県立人と自然の博物館（2003編）ひとはくがやってくる'02。兵庫県立人と自然の博物館、三田、7p.
- 糸魚川淳二（1999）新しい自然史博物館。東京大学出版会、東京、229p.
- 松宮秀治（2003）ミュージアムの思想。白水社、東京、276p.
- 染川香澄・芦屋美奈子・井島真知・竹内有理・徳永喜昭（2000訳）ハンズ・オンとこれからの博物館。東海大学出版会、東京、256p.
- 染川香澄・吹田恭子（1996）ハンズ・オンは楽しい。工作舎、東京、242p.



写真1 企画展「ワンダフルカラー」の展示



写真2 企画展「ワンダフルデザイン」の展示

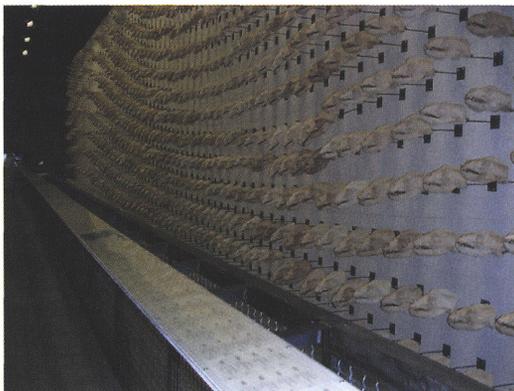


写真3 海外の博物館の展示

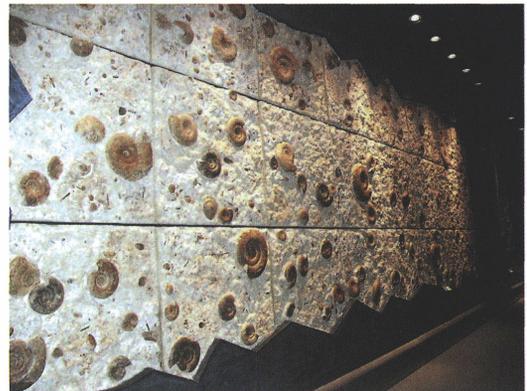


写真4 神奈川県立生命の星・地球博物館の展示



写真5 北九州市立自然史・歴史博物館の展示



写真6 北九州市立自然史・歴史博物館の展示



写真7 北九州市立自然史・歴史博物館の展示



写真8 北九州市立自然史・歴史博物館の展示



写真9 三田市立有馬富士自然学習センターの展示
1は分解前, 2は分解後.



写真10 三田市立有馬富士自然学習センターの展示



写真11 三田市立有馬富士自然学習センターの展示